江陽小

主体的に学ぶ児童の育成

～問題解決の意欲を持続させるための「はたらきかけの工夫」～

（３年計画の３年次）

校長　　三津谷　喜美典

１　研究主題について

令和４年度の研究主題『主体的に学ぶ児童の育成～問題解決の意欲を持続させるための「しかけ」や「発問」の工夫～』の実践についてのアンケートでは、導入は、児童の知的好奇心を刺激し日常化できるしかけを行うことができたという意見が９０％だった。また、展開では、授業全体を通して児童の主体性が持続するようなしかけの工夫や効果的にしかける場面選びについて、指導者が意識し、それぞれに実践を積み重ねた。実際、自力解決の場での「しかけ」や「発問」の工夫によって、児童が主体的に学習に取り組む姿が見られた。

一方、導入、展開ともに、しかけを毎時間考えることは難しいことやしかけの捉え方に差が生じていること、また、特別な支援を要する児童への指導を意識した発問の工夫が必要であることが課題として挙げられた。

そこで今年度は、これまでの「しかけ」には、「問い返す」「誤答を出す」のような日常的にできるものも含まれることを共通理解し、日常化を意識した「はたらきかけの工夫」について研究を深めることにした。

昨年度に引き続き、導入から課題設定においては、「教材提示、問題提示」によるしかけに加え、「発問や指示」を明確にすることで、児童が自ら問題を発見できるようにした後、問いを共有し、学習課題を設定する。また、展開では、問題解決の意欲を持続させるために児童の実態に応じて「はたらきかけの工夫」をする。このように「はたらきかけの工夫」をすることで、「解決したい、達成したい」という思いを持続させ、主体的に学ぶ児童を育成していきたい。

２　研究のねらい

問いをもち、最後まで児童の問題解決の意欲が持続するような「はたらきかけの工夫」について、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

児童が課題を自分ごととしてとらえ、進んで考えたくなる「はたらきかけの工夫」をすることで、問題解決の意欲を持続させ、主体的に学ぶ児童を育成することができる。

４　研究内容

(1) 問いの意識をもたせ、問題解決の意欲を持続させるための「はたらきかけの工夫」

ア　授業の導入から課題設定における「はたらきかけの工夫」

イ　授業の展開における「はたらきかけの工夫」

５　研究の経過

（１）研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
６	５	第１回授業研究（要請訪問　２学年） 「長さ」 授業者　　教諭　和泉　知子 指導助言　八戸市総合教育センター 副所長兼主任指導主事 松橋　祐哉　氏	導入で長さと向きの異なる２本の直線を提示し、予想させた。ネームプレートを活用したことで、意欲的に学習に参加することができた。つまずきが予想されるものさしの導入で、グループ活動を取り入れたことが、意欲の持続に効果的だった。
１１	１	第２回授業研究（６学年） 「立体の体積」 授業者　　教諭　大川　勇介 指導助言　本校校長 三津谷　喜美典	複合図形の体積の解法を共有し、どの方法で解くのか立場を表明させたことで、意欲的に問題解決に向かうことができた。また、友達が考えた式を説明し合うことで、多様な解決方法があることに気付くことができた。

（２）一般研修

月	日	内容等
４	２６	児童理解・生徒指導情報交換
５	３１	江陽中学校区ジョイントスクール研修会（江陽中での授業参観と情報交換）
６	２１	救命救急法の講習会　　講師：八戸市東消防署小中野分遣所の方々
６	２８	１人１台端末の活用について　　講師：本校教頭　石井　一二三
７	５	通常の学級における特別支援教育について 講師：八戸市教育委員会こども支援センター 主任指導主事　横沢　吉則　氏
１０	２５	１人１台端末の授業での活用について　講師：本校教頭　石井　一二三
１１	２２	江陽中学校区ジョイントスクール研修会（江陽小での授業参観と情報交換）

６　研究の成果

（１）具体物の提示や立場の表明、誤答の提示、問い返しなどの「はたらきかけの工夫」を行ったことで、課題を自分ごととして捉え、生き生きと学習に取り組む姿が見られた。

（２）展開時において、グループ活動を取り入れたり、友達の考えを説明する活動を取り入れたりすることは、問題解決への意欲の持続に効果的であった。

（３）「はたらきかけの工夫」の実践を共有する場を設けたことで、日常化へとつながってきている。

７　研究の課題

（１）問題解決への意欲が途切れてしまう児童が見られた。来年度も「はたらきかけの工夫」の実践を積み重ね、児童の実態に合ったよりよいはたらきかけを検証していく必要がある。

（２）「聞く力」「話す力」を高める手立てを日常的に講じながら、児童が「聞きたくなる、話したくなる」ような「はたらきかけの工夫」をしていく必要がある。

〈記入者　和泉　知子〉